

## 荻内勝之教授退任記念号の発刊に寄せて

荻内勝之先生は、神戸市外国語大学外国語学部イスパニア学科を卒業後、バルセロナ大学文学部に留学、さらに神戸市外国語大学大学院外国語学研究科イスパニア語学専攻の修士課程を終えられて、1970年4月に本学に赴任されました。以後、40年余りにわたって、「スペイン語」、「外国文学Ⅰ」を、さらに経営学部からコミュニケーション学部に移ってからは「異文化コミュニケーション」などの科目を新たに担当されました。

荻内先生のご専門は、スペイン語圏の文学ということなのでしょうが、その仕事の中核をなすのは、『ドン・キホーテ』（全4巻、新潮社、2005年）の翻訳に結実する、セルバンテスに関する研究のように思われます。その他にも、ロルカの翻訳やラテンアメリカ文学に関する翻訳、さらには「食」の問題など、広くスペイン文化にかかわる多くの著作を著わされています。このような多面的な関心に支えられた「外国文学Ⅰ」の講義や「総合教育演習」などのゼミは、多くの学生の関心を喚起したのではないのでしょうか。

スペイン語圏の文学の門外漢の私が、一つだけ楽しませてもらったのが、児童文学というジャンルに入るのだと思いますが、『おっ父ったんが行く』（福音館、1994年）という作品でした。この自伝的作品は、「敗戦」直後の日本社会のある断面をよく伝えてくれると同時に、荻内先生の人となりの背景をもうかがわせてくれるものとして興味深い一冊でした。

大学における、これからの「スペイン語」教育の課題など、お聞きしたいことも多々ありますが、まずは先生のご健康と、今後のご活躍を祈念したいと思います。

2015年1月

全学共通教育センター長 横畑知己